

春寒

大窪詩仏

寒食今より幾日も無し

梅花は零落し杏花は開く

春寒雪醸力足

却て黄昏向雨成る

【作者】大窪詩仏(一七六七〜一八三七年)(明和四年〜天保八年)、江戸時代後期の漢詩人である。書画も能くした。常陸国久慈郡袋田村(現茨城県久慈郡大子町)に生まれる。名は行(こう)、字は天民(てんみん)、通称を柳太郎、のちに行光、号は詩仏のほか柳侘(りゆうたく)、瘦梅(そうばい)、江山翁(こうさんおう)、玉地樵者、艇棲主、含雪、縁雨亭主、柳庵、婁庵、詩聖堂(しせいどう)、江山書屋(こうさんしよや)、既醉亭(きすいてい)、瘦梅庵(そうばいあん)とも号した。号の詩仏は唐詩人杜甫が「詩名仏」と称されたことによるものか、あるいは清の袁枚の号に因むと言われる。

【語釈】*春寒…春になつても残る寒さ。 *寒食…中国で、冬至の後一〇五日目の日は、風雨が激しいとして、火の使用を禁じて冷食した古俗(こぞく)。*零落…草木の葉が枯れ落ちること。落ちぶれること。死ぬこと。 *杏花…あんずの花 *黄昏…夕暮れ。たそがれ。

【通釈】寒食の時節まで幾日もない。梅の花は散つて、杏の花が咲き始めた春寒で雪雲が空をおおっているが雪を降らせる力はない。かえって、夕方になつて雨になつて来た。